

静嘉堂文庫所蔵 松浦武四郎旧蔵資料の人文学的研究

(古墳時代金属器編)

内川 隆志*・村松 洋介**

1. はじめに

「北海道の名付け親」として知られる松浦武四郎は、文化15(1818)年2月6日、紀州藩領の伊勢国一志郡須川村(現三重県松阪市小野江)に郷士の三男として生まれ、13歳から津藩の儒者である平松樂斎の私塾で学び16歳で江戸に家出して後、17歳から26歳に至る10年を諸国放浪に費やした。長崎でロシアの南下を耳にして以来、その眼差しは蝦夷地に注がれ、弘化元(1844)より彼の地を目指し、翌年その志を果たした。その後私人として2回、幕府雇いとして3回の蝦夷地調査を実施し蝦夷地を紹介する多数の紀行類を出版し、名実共に武四郎の名は広く世に知られたのである。維新の後、明治2(1869)年には蝦夷開拓御用掛、開拓判官の命を受けるも翌年には職を辞し、明治21(1888)年2月10日に逝去するまで東京神田五軒町に居を構え、多くの友人知己との交わりの中で古物を中心とした蒐集と研究に没頭したのである。

ここに紹介する資料は、明治3(1870)年に開拓判官を辞して以降、蒐集された考古・工芸品を含む松浦武四郎旧蔵資料の一部であり、木箱に収められた状態で公益法人静嘉堂文庫に保管されてきたものである。考古資料の幾つかは、武四郎の自書『撥雲餘興』(明治10年刊)、『撥雲餘興』二集(明治15年刊)に所載されており、出土地、採集地の特定が可能であることは該期におけるコレクション形成史上稀に見る好資料である。『撥雲餘興』を読解した吉田武三には「この大著に収められた珍器逸品が、現在どうなっているか筆者は、仄聞も目認もしていない」(吉田1964)とあることから、これまで全く世に知られていない資料であることが理解できよう。本コレクションは、紆余曲折を経て運良く静嘉堂文庫に収まり、戦火、散逸の憂き目に遭わなかった奇跡のコレクションとも言える。同文庫の松浦武四郎旧蔵資料は、これまで百万塔など一部について研究されたことはあった(増田他2007)がその他の資料については嚴重に管理され、衆目に触れることはなかったのである。

北方探検家としての松浦武四郎研究は、これまでに膨大な研究が知られるものの、近代における個人コレクション形成史という観点で「好古家松浦武四郎」に焦点をあてたものは少なく、一部その片鱗を紹介するものとして、国際基督教大学構内に残された武四郎の書斎である「一畳敷」の研究(ヘンリー・スミス1993)が知られる。また、平成16(2004)年北海道開拓記念館で開催された「松浦武四郎 時代と人びと」展(笹木他2004)、平成20(2008)年に、松浦家から寄贈された重要文化財指定物件の展示が松浦武四郎記念館で恒常化して以降、俄然注目されてきた部分でもある。本稿は、松浦武四郎旧蔵資料の内、古墳時代の金属器を中心に考古学的な観点で分析を試みるものである。

2. 静嘉堂文庫所蔵資料の考古学的位置づけと『撥雲餘興』

(1) 八角形鈴①(図1-1・写真1)、八角形鈴②(図1-2・写真1)

八角形鈴①②が収納されている箱は杉材の四方箱で、①の蓋表には、「皇和宝銅 第壹」、「古銅鈴」、蓋裏には「辛未夏日□六観」㊦とある。

②の蓋表には「勢州三重郡泊邨農民堀地獲之」、「古鈴」、「皇和宝銅 第貳」、蓋裏には「明治庚辰之冬 □□」㊦とある。また八角形鈴①②ともに鈴口に小さな欠損部分があるものの、残存状態は良好で、ともに鑄造製品である。

八角形鈴①は全長15.2cm、鈴長13.1cm、正面幅11.3cm、側面幅11.6cm、鈕形態は鈴口と直行し正方形を呈する。鈕高2.0cm、鈕厚さ2.1cm、鈕孔径1.0cm、型持孔径0.7cm～0.8cm、鈴口長11.0cm、鈴口幅0.7cm、重量は1020g（真鍮部含む）である。

八角形鈴②は全長14.8cm、鈴長12.8cm、正面幅11.3cm、側面幅11.5cm、鈕形態は鈴口と直行し正方形を呈する。鈕高2.1cm、鈕厚さ1.4cm～2.5cm、鈕孔径0.9cm、型持孔径0.7cm～0.8cm、鈴口長11.2cm、鈴口幅0.5cm～0.8cm、重量は910gである。

八角形鈴は、鈴高によって小型品（4.0cm～5.9cm）と、大型品（8.3cm～13.2cm）に区分することが可能で、両者の鈴高は朝鮮半島出土資料を含めても最大級のものと位置づけられるという（最大は韓国慶尚北道義城郡鶴尾里古墳1号横穴式石室出土）。

①②鈴体の最大径は中位よりやや下方に位置し、側面形は卵形で、胴部のやや下位には三条の突帯がめぐる。鈴の上下方向には8本の稜があり、真上から見た形状は丸みをもつ正八角形である。

鈕の形態は、①は側面正方形、②は台形で、方向は鈴口と直角である。鈕孔には径1.0cm程度の鉄製棒が挿入され、錆び付いている。また、①の鉄製棒には後に真鍮製の釣金具が取付けられている。真鍮製釣金具は、『撥雲餘興』には描かれていないが、松浦が14歳の時に本居宣長の書斎「鈴の家」を見て、そこにある鈴を模写した『古鈴図』にみられる黒漆棒に吊るした驛鈴からその用途を想定し、自身で装着したものであろう。

鈕は鈴口の方向と直角のものと同一方向のものとに分類できる（白木原2002）という。鈕と鈴口の方向については馬鈴とした場合の装着方法や、音響などにも影響を及ぼすと考えられるが、島根県上塩冶築山古墳出土品など他の馬具類とは出土位置が異なっていた例や、韓国慶尚北道義城郡鶴尾里古墳1号横穴式石室出土品のように鈴幅よりも径の大きな鉄板を鈕部分にはめ込んだ例もみられ、その用途を馬鈴と限定することは難しい。

一方、八角形鈴の起源や祖形については、未だ多くの問題が残されているが、大形化していく傾向にあると考えられ（八尾市立歴史民俗資料館1991）、その初現が6世紀中頃である。①②のような鈴口と鈕の関係が直角方向である八角形鈴は、6世紀後半から7世紀初頭の古墳から出土することが明らかになっており（白木原2002）、形状、サイズともに類似している平成23（2011）年福岡県福岡市元岡G6号墳で八角形鈴と共伴した「庚寅」銘鉄刀の製作年代（570年）は①②の製作年代を考える上で重要な定点となろう。よって八角形鈴①②は6世紀後半頃の製作と考える。

鈴口の端部とその周縁の形態は、②は連弧形であるが、弧は平滑で極めて方形に近い。①は、方形を呈し、若干差異がみられ、両者の上部にある三条の突帯とは接していない。

鈴の内側には孔をもつ平面形楕円形で長径3.0cm程度の空洞の銅丸があり、さらにその中に石でできた丸が入っており、鈴全体を振ると高度の異なる2種類の音が鳴る。馬鈴の丸自体が鈴となっている例には鶴尾里古墳1号横穴式石室出土品3点、釜山広域市徳川洞21号墳から出土した1例がある。一方上塩冶築山古墳出土の丸は鉄製で鈴内側に錆び付いた状態となっている。

鈴体部上方には、鑄造時に中型を固定する型持孔が、それぞれ対称位置に2組、4箇所空いている。銅鈴の中でも小型のものは、鈴口に当たるハバキだけで中型を支持することができるが、八角形鈴のような大型品は、ハバキ（鈴口）の幅が狭いため、別に中型を固定するために支持棒などが必要である。2箇所ないし4箇所の型持孔は大型の八角形鈴の中型を固定するための技術的な痕跡である。一方、八

角形鈴の中では、大型品は型持孔が4つ、小型品は型持孔が2つという原則が看取できる。そのため4箇所の型持孔は鑄造時に大きな中型の安定性を高めるための技術的工夫と考えられる。

八角形鈴の日本列島での分布は宗像市周辺の玄界灘沿岸の北部九州と埼玉県北部や栃木県南部にやや集中し、関東北部から九州南部に点在している一方で、朝鮮半島では、徳川洞21号墓（1点）、鶴尾里古墳1号横穴式石室（3点）など新羅の領域または新羅土器と共伴し、新羅の強い影響下にある地域のみで出土している。生産体制や各地域への流通の詳細はここでは論じることができないが、八角形鈴は、古墳時代後期における日羅交流の産物であることがわかる。

八角形鈴は、文化8（1811）年に編纂された澁花井の『古鈴図』に「信濃国飯田南條村白鷄山彩雲寺掘出」「カラカネ」として均一な太さの線で鈴口端部側のやや上方からの角度で描かれており、8角形、三条突帯、4つの型持孔、丸が鈴になっているなどの特徴も記されている。

『撥雲餘興』では八角形鈴②が杉陰島栄之（中島杉陰）、『撥雲餘興』二集では八角形鈴①が渡辺小華によって図化されている。杉陰島栄之の描いた八角形鈴②は斜め左上から『古鈴図』同様に、均一な太さの線で描いている。細部は、三条の突帯が鈴のやや上部に位置していることや、鈕の形状、鈕孔に鉄棒が挿入されていること、型持孔の位置と形状、鈴口端部の形状など細部に至るまで精密に描いている。この他にも1点が紀州家に所蔵されていると書かれている。

①②以外の1点は、上述の通り、紀州家にあったことが嘉永3（1850）年の序文と、同4年の祓文をもつ『ちとせのためし』所載の古鈴図で確認することができる。『ちとせのためし』には、八角形鈴②と酷似した八角形鈴が多色刷りで模写されており（図6）、『撥雲餘興』所載の図は、これを手本とした可能性が高いものと考えられる。

一方、渡辺小華の描いた八角形鈴①は、鈴を俯瞰した状態を筆で描いている。細部は、8つの稜線をもつこと、4つの型持孔が正確に描かれているが、全体・細部の形状を把握するのは困難である。両者は、鈴口端部の形状が方形であることがわかることから、八角形鈴①②を区別することができる。

杉陰島栄之（中島杉陰）は、弘化2（1845）年生まれの東京の人で、下谷区に住んだ人物であった。画法を山水・花鳥画の大家鈴木鶯湖に学び、後に南北合一派として究めた。杉陰は、明治29（1896）年に行われた師鈴木鶯湖の27回忌に追善の画会を催した際にも門人を代表して主催者としてその名を出しており、鶯湖の門下では第一に挙がる人物であった。

松浦は当時江戸で画業を営んでいた中島の師の鈴木鶯湖に安政6（1859）年に刊行した『北蝦夷余誌』に挿図を描かせ、万延元（1860）年に刊行した『石狩日誌』に祓文を書かせている。

また『撥雲餘興』で「山城國松尾山土中所獲古鈴」の如図を描いた福島柳圃や、鈴木の子の石井鼎湖、竹本石亭、春木南溟らとともに『赤壁賦』の故事にちなんで描いた寄書にも鈴木、中島、福島は名を連ねており、松浦が鈴木を通じてこれらの人物の知遇を得ていたことが推測される。

『撥雲餘興』『撥雲餘興』二集には、採集地が「伊勢國三重郡泊村田の山」とあり、現在の三重県四日市市大字泊村付近であることがわかる。泊村には、海岸平野を見晴らす丘陵の東縁に4基からなる茶臼山古墳群が占地する。このうち1号墳と4号墳が発掘調査され、出土した埴輪や須恵器などから5世紀後半～6世紀初頭に位置づけられており（四日市市遺跡調査会 1996）。これらの事実から、八角形鈴の採集地は茶臼山古墳群か、消滅してしまったこの地域の古墳であることが推定できる。

（2）五鈴鏡板付轡（図2-3、写真2）

箱蓋表には、「皇和宝銅 第三」、「古鈴（一枚）」と記されており、裏には「多氣志樓 蔵」「万菴三兼題籤」㊦とあり、「万菴三兼」とは市川万菴のことである。市川は、江戸末期から明治期にかけての

能書家で、市河米庵の子、市河三喜の父である。また、江戸出身で幕臣時代、洋式砲術を学んだ鉄砲方で、海保醉茗に篆刻を学んで、書を教えた。彼は、明治元(1868)年から大蔵省に勤務し、明治3(1870)年にはロンドンで制作された新紙幣の文字を書いた人物でもある。

五鈴鏡板付轡は、鏡板部分のみが残存し、鏡板の残存状態は良好で鑄造製品と考えられる。縦4.8cm、横6.7cmの楕円形で、厚さは0.4cmである。立間と鈴を含めた全体の大きさは、縦10.8cm、横9.1cm、重量225gで楕円形の鏡板の縁部左右に各2個、下面に1個、計5個の鈴を配している。

鈴は、鏡板の周縁部のやや内側まで食い込んでおり、直径はいずれも2.9cmで、鈴の内部には直径0.8～1.0cm程度の石丸がある。鏡板の外縁には直径0.2cm～0.3cmの鋳状に鑄出された珠点が左に8個、右に10個、計18個配されている。鏡板の孔は、外縁が縦2.0cm、横1.5cm、内側が縦1.5、横1.0cmの楕円形である。

立間は、縦1.4cm、横2.2cmの長方形で、厚さは0.5cm、断面は台形である。立間には、鋳状の珠点が鑄出されておらず、孔は、縦0.7cm、横0.7cmで、顕著な磨滅がみられる。

鈴付鏡板の分類の指標となるのは、従来、鈴の食い込み度合いと、鏡板縁部や立間における鋳表現の大きさや有無であったが、これらの属性変化と共伴遺物のセット関係は、必ずしも対応しないという指摘がある(桃崎2011)。本資料は、鈴の食い込みがやや弱く、鏡板部の珠点が一重であること、立間や鏡板縁部に鋳表現がないという特徴をもつ。鈴の食い込みと鋳表現の有無による戦後関係の認定には慎重を要するが、初期の鑄銅製鈴付轡でないことは確かである。本資料は、共伴した遺物から時期を限定することは難しいため、現時点では桃崎の認定に従い、Ⅱb～Ⅲb期(TK47～MT15)の中にあるという大まかな結論に留めておく。

五鈴鏡板付轡は、松平定信編集の『集古十種』の銅器にみられ、ここでも鏡板のみが紹介されており、別に馬具の項があることから、鈴として認識されていた。

『撥雲餘興』には天保年間に、同一形状の鈴2点を近隣の草刈をしていた男が掘り出し、諸々の人物の手を経て柏木貨一郎が秘蔵し、その後、松浦がその古鈴を譲り受けたいと柏木に懇願し、松浦の熱意に折れた柏木から贈られたことが記されている。

この五鈴鏡板付轡の採集地としては、「山城国乙訓郡松尾の社の周辺の山」とあり、現在の京都府西京区に所在する松尾神社周辺の稜線上には、古墳時代後期の松尾山古墳群があり、その中で半壊した横穴式石室の存在が数基確認されていることから(細谷他1968)、これらの古墳の副葬品であった可能性が高い。

『撥雲餘興』では、表裏面の挿絵を福島柳園が、鈴の食い込み度合いや珠点の位置、数などに留意して写実的に描いている。

(3) 三鈴杏葉①(図2-4・写真2)、三鈴杏葉②(図3-5・写真3)

三鈴杏葉①の蓋表には、「皇和宝銅 第四」、「古鈴」、「多氣志樓 蔵」、蓋裏には、「明治九年立冬前一日 湖山樓主 長愿題籤」㊦㊦と書かれている。

三鈴②杏葉②の蓋表には、「皇和宝銅 第五」、「十字鈴」、蓋裏には、「古色可相掬古音猶存」、「明治十年第四月」、「湖山老人愿題」㊦㊦とある。「長愿」、「湖山」とは、梁川星巖門下の漢詩人で安政の大獄に連座して幽閉された小野湖山であり、湖山の名は、伊勢国津の豪商、川喜田石水に宛てた松浦41歳の時の書簡に記されている。それには「…一向の友人も無之候間、是を集メ屏風ニ致し眺度候、横山湖山の詩風ニ類し、私共は歌屏風をこしらへ候つもりニ御座候間、…」とあり、その後、明治6(1873)年には、神田五軒町の土地を共同購入するなど親しい交友を結んでいたことなどから(三浦2004)、明治九(1896)年に小野湖山に箱書きを書かせている。

三鈴杏葉①は、欠損もなく完形の鑄造製品である。全長15.9cm、幅16.3cmで、重量は938gである。①は、現状では、三鈴杏葉の中で最大のものとされている。

立間は長さ2.9cm、幅3.3cmの長方形で、厚みは0.7cm、断面形態は隅丸の台形である。立間下部には扁円部と接して径1.1cmの円形の孔がある。

板状部は、長さ7.0cm、最大幅5.0cmで上下の弧により形成された扁円部と下方の三角部に区分でき、三角部の断面は左右両端部が突出している。扁円部の文様は、中心に径0.9cmの珠文をもち、その周囲は径1.4cm程度の圈線で区画されている。圈線からは各2本単位で放射状に沈線が8本伸び、扁円部を4区画している。2本の突線の間には2個の珠文が縦に配され、沈線の間には径0.4cm～0.2cm程度の珠文が三角形に配されている。

三角部は、中心に0.9cmの大粒の珠文をもち、その周囲には径0.4cm程度の珠文が大粒の珠文上方に左右2個、下方に1個施文されている。三角部の右辺端部にはキサゲ状の研磨痕跡が残っている。

鈴は、板状部の左右と下に径6.4cm、6.5cm、6.3cm、高さ6.1cm、6.4cm、6.5cmの球形鈴が3個配されている。鈴口の長さは5.6cmで、鈴の3/4程度まで食い込み、幅は0.8cmである。鈴内部には径2.8cmの石丸がある。板状部と鈴は、鈴口端部の中央部の高さで接続してある。

三鈴杏葉②も完形で鑄造品である。全長9.2cm、幅9.0cmで、重量は109.2gである。

立間は長さ2.3cm、幅2.7cmの長方形で、厚みは0.3cm、断面形態は隅丸の台形である。立間下部には楕円部と接して径1.0cmの円形の孔がある。

板状部は、上下の弧により形成された扁円部と下方の三角部に区分でき、三角部の断面は左右両端部が突出している。扁円部の文様は、中心に0.6cmの珠文をもち、その周辺には0.2cm程度の珠文が10個施文されている。

三角部は中心に0.9cmの大粒の珠文をもち、その周囲には径0.4cm程度の珠文が大粒の珠文上方に左右2個、下方に1個施文されている。

鈴は、板状部の左右と下に径3.1cm、3.2cm、3.2cm、高さ2.4cmの扁平球形の鈴が3個配されている。鈴口の長さは2.8cmで、鈴の2/3程度まで食い込み、幅は0.3cmである。鈴内部には石丸があるが、法量は計測できなかった。板状部と鈴は、鈴口端部の中央部の高さで接続してある。

三鈴杏葉については、本居宣長が門人である蓬萊尚賢から譲り受けた品で、内宮の境内、五鈴川のほとりの神路山から発見されたものがあることは有名である。また先述の澁花井の『古鈴図』、大田南畝(蜀山人)著『古鈴記』、伴蒿蹊『古器図』完など多くみられ、当時の好古家から大きな注目を集めていた器物であったことがわかる。

杏葉は、八木装三郎が馬形埴輪にみられる表現から馬具として認識したことが研究の端緒である(八木1897)。その後、柴田常恵は杏葉に鈴が付け加えられたものとして従来の「十字鈴」「板鈴」「三岐鈴」に代えて「鈴杏葉」の呼称を用いた(柴田1905)。

三鈴杏葉の祖形は、一般的に鉄地金銅張の剣菱形杏葉と考えられ、それを手本として鋳表現などを鑄造で鑄出し、下半の剣菱形が短縮されるとともに、七鈴、五鈴杏葉から三鈴杏葉へと変化していくと考えられているが(小野山1959など)、三鈴杏葉の出現に関しては、五鈴杏葉の出現からあまり遅れることなく独自に三鈴杏葉が出現し、直接的な祖型を『集古十種』にみられる二鈴杏葉にもとめ、最古の三鈴杏葉を小型短小のものとする説(永沼1983)がある。

一方、五鈴杏葉の要素が退化し、埼玉稻荷山古墳出土資料のような定型化した三鈴杏葉がまず出現して次第に退化していくと捉える説があり(後藤1941・1942、小野山1959・1975・1998、斉藤1984、白石1997、宮代1996)、特に埼玉稻荷山礫礫出土三鈴杏葉の実年代について重点が置かれている。

紙面の関係上本論では、これらの議論についての検討は避けるが、資料自体を再度集成し、埋葬施設や須恵器、その他の馬具との共伴関係と内区の扁円区画の有無と、扁円部、三角部における中心珠文の有無という属性変化から総合的に検証した桃崎祐輔の段階設定を用いる。

三鈴杏葉①の内区は、扁円部と三角部に区分され、それぞれ中心珠文をもっている。さらに扁円部内には、2本単位の放射状線文によって4分割されている。扁円部の珠文は、各区画で中心側の中央部に1点、周縁部に2点施文されており、2本の放射状線文の間には中心珠点から周縁に向かってそれぞれ2点珠文が施されている。

三角部には中心珠文の上部に2点、下部に3点珠文を施し、上部の珠文は並列し、下部の珠文は中心珠文直下に2点、さらにその下に1点の二段に施文されている。

これらの特徴から三鈴杏葉①と共通する2本単位の放射状線文をもつものには、國學院大學所蔵の三鈴杏葉があるが、珠文の配置場所や各区の形状は大きく異なっている。放射状線文の出現背景については、鈴杏葉の珠文が仿製鏡のそれに由来する可能性が高いことから（桃崎2011）、放射状線文も仿製鏡の文様から移植された可能性がある。また珠文の配置は、扁円部において、三鈴杏葉①が各区に3点ずつ珠文を配置し、より規則的な文様配置といえる。

一方、三鈴杏葉①は、扁円部、三角部の形状や鈴の食い込み具合、扁円部の珠文の配置、数などをみる限り、Ⅳ段階頃のものと同類似度が高く、6世紀後半頃と考えられる。

出土地は、『撥雲餘興』には柏木貨一郎が描いた挿絵が掲載され、「大和国十市郡」から掘り出されたことが記述されている。十市郡は、現在の明日香村、高取町に該当するが、出土古墳についての比定は難しい。掘り出された後、三鈴杏葉①は、蜷川大和守に所蔵され、その後、ある人物を通じて入手したことが書かれている。箱書きには「古鈴」とあったが、『撥雲餘興』には、①②ともに「十字鈴」として紹介されている。

三鈴杏葉②も、内区が扁円部と三角部に区分され、それぞれに中心珠文をもっている。扁円部はかなり扁平で、中心珠文の周りに6点の珠文がありさらにその左に1点、右に3点の珠文を配している。

三角部内には、他の珠文とあまり大きさの変わらない中心珠文と上部に2点の珠文が並置され、下部には1点が施文されている。これらの特徴から、最も類似度が高いのは群馬県上芝出土品で、Ⅲb段階に位置づけられ、その年代は6世紀前半以降と考えられる。

出土地は『撥雲餘興』に「武州大里郡」とあるが、正確な出土地は不明である。

(4) 六鈴銅釧 (図3-6、写真3)

六鈴銅釧の蓋表には、「皇和宝銅 第六」と書かれており、それ以外の記載と箱裏側への記入はない。

六鈴銅釧は、2個に折れており、割口部分以外はほぼ残存し、鑄造製品と考えられる。

六鈴釧は、鈴部まで含めた径が10.2cm、鈴の径は1.8cm～1.9cm、高さは2.1cm～2.2cmでやや高さのある球形を呈し、鈴に突帯はない。鈴は釧の周縁に取りつく程度で、鈴の中にはそれぞれ径0.5cmほどの石丸が入っている。鈴口の長さは1.8cmで幅は0.3cm～0.5cmで、鈴口は鈴の8割程度まで食い込んでいる。釧の外側は縦7.5cm、横7.2cm、内側は縦6.3cm、横6.0cmの短楕円形で、重量は116gである。

鈴間の距離は上部から右回りに2.1cm、3.0cm、2.2cm、1.5cm、2.2cm、3.0cmとなっており、6等分されていないが、最初に左右に配置されている鈴の割り付けを行った後、それを基準に上下を対角線上に結んで2箇所ずつ鈴を配置したのと考えられる。

釧部の断面形状は、釧の外側の辺が長い隅丸菱形である

鈴釧は、古墳時代中期末～後期の東北地方から九州に広くみられるが、分布の中心は東日本南部にあ

る。円環形鈴釧は4鈴から8鈴のものまで認められるが、4・7・8鈴のものは、各1例ずつである（渡辺2002）。

鈴釧自体の分類は、未だ十分ではないが、他の遺物との共伴関係から、TK 23・47式期前後の初期の鈴釧は、環径、断面径、鈴のサイズと数でばらつきが大きく、TK43式期以降は、5・6鈴のものが主流となることがわかっている。静嘉堂文庫所蔵の六鈴銅釧は、鈴数、鈴の径、釧の内径、断面形などから判断して、初期のものではなくTK43式期以降のものである可能性が高い。

（5）五鈴杏葉（図3-7・写真3）

五鈴杏葉の蓋表には、「皇和宝銅 第七」、「乎字鈴」、「多氣志廬蔵」、蓋裏には、「二千五百三十八年紀元節 湖山老人 長愿題」㊦㊦と書かれており、明治11（1878）年に三鈴杏葉と同様に小野湖山に箱書きを書かせている。

五鈴杏葉は、欠損もなく完形で鑄造製品である。全長10.2cm、幅7.6cmで、重量は938gである。

立聞は、長さ1.3cm、幅1.8cmの長方形で、厚みは0.5cm、断面形態は台形である。立聞下部には隅丸方形で長さ0.9cm（最大）、幅0.7cmの孔があり、鉄錆が付着している。

板状部は、長さ6.1cm、最大幅2.6cmで、隅丸方形の扁円部とその下部の菱形部に区分でき、剣菱部の断面は左右両端部が突出している。扁円部の文様は、直径0.3cm程度の珠点をほぼ中心に配置し、その周囲には径0.4cm程度の珠点を5個配置している。

剣菱部内区にも下方の中央に径0.3cm程度、その周囲にも0.3cm程度の12個の珠文を配置しており、珠文は扁円部、菱形部ともにサイズに大小はない。

鈴は、扁円部の左右に径2.7cm、高さ2.3cm～2.5cmの扁球形の鈴が5個配置されている。鈴口の長さは2.7cmで、鈴の3/5程度まで食い込み、幅は0.3cmである。鈴内部には径0.8cmの石丸がある。板状部と鈴は、鈴口端部の上端の延長線上の位置で接続している。

三鈴杏葉と同様、五鈴杏葉も扁円部と剣菱部における中心珠文の有無が時間的な要素と捉え、埋葬主体部や共伴遺物のセットから考えると、扁円部、剣菱部の中心に珠点をもつものの、その径は、その他の珠文と変わらないことから、Ⅰb段階とⅡa段階の過渡期的段階のものと捉えられ、扁円部が隅丸方形を呈している。類例は、栃木県雀宮牛塚古墳出土五鈴杏葉を挙げることができ、須恵器編年でTK47段階の製品であることがわかる。

『撥雲餘興』二集には、河鍋暁斎により挿絵が描かれ、三田蓀光が、「松浦北海翁の上代の鈴をあまたあつめられたるを見て 石上ふるきをしたふ君が名もいよいよひく鈴の音かな」と詠んでいる。三田は、漢学者、歌人で、石州流鎮信派の茶人でもあり、和敬会「十六羅漢」の一人に数えられる。明治政府においては権少内史に任官され、当世で一流の文化人であった。また三田は、その後坪井正五郎が主宰し、後に根岸武香が会長を務めた「集古会」のメンバーとして名を連ねることとなる。

（6）三環鈴（図3-8・写真3）

三環鈴が収納されているのは、縦横11.5cm、高さ6.0cmの桐箱で、蓋表には「皇和宝銅 第八」、「品字鈴」とあり、蓋裏には「明治十三年庚辰春 三月廿三日為 北海翁雅属 巖谷修題」㊦とあり、内閣大書記官・元老院議員・貴族院議員などを歴任した著名な政治家であり、また能書家としても有名な巖谷修（一六）に題字を書かせている。

三環鈴は、鈴1個が約1/3を欠き、丸が欠失しているが、それ以外の残存状態は良好である。球形の鈴が3個、均等位置に配されている。鈴の径はいずれも4.4cmで平面は正円に近い。側面から見た高さ

は4.2cmで径よりも低いことから、やや扁球形を呈している。

平面図上で個々の鈴の輪郭の中心点を出し、3つの中心点を結ぶと、5.7cm、5.7cm、6.1cmと正三角形に近い二等辺三角形となり、鈴は均等間隔で配置されているとは言えない。環への鈴の付着形態は、両者が離れ、脚状のブリッジを介するものと、環に鈴が食い込むものがあり、食い込み度合いも様々である。静嘉堂文庫所蔵の三環鈴は、後者で、各鈴の食い込み度合いは同じではないが、環の内径に接する程度まで食い込んでいる。また環の内縁はほぼ正円で、外縁は緩い円弧状である。したがって本三環鈴は、円環に鈴が接続される例とは異なり、直線に近い円弧によって各鈴を連結した形状である。

環の断面形は、長楕円形、あるいは隅丸扁平の菱形で、中央からやや外側に緩い稜線をもっている。断面の厚みは最大で0.4cm、幅は0.9cmである。

鈴の側面には、合範の合せ面に生じた隆起線とその周囲に膨らみがみられる。この合範時の鋳バリに由来する隆起線は、鈴口端部の中央に生じており、合範の両面に同じ形状の鈴、環部を彫刻したことがわかる。

鈴口は、鈴の60%程度まで食い込んでおり、幅は0.5cm程度である。鈴内には径1.0cm程度の石丸が入られている。

三環鈴は、概ね5世紀前半から6世紀前半の遺跡から出土する。分類基準は、環と鈴の取り付けに基部を用いるか（有基式：Ⅰ）、環に鈴を食い込ませて取り付けるか（無基式：Ⅱ）と、環を三等分する位置に鈴を取り付けるか（B）、また不均等に取り付けるか（A）（鈴の中心点を結んだ三角形が正三角形か二等辺三角形か）、環の直径は鈴の直径よりも大きい（a）、同じ（b）、小さい（c）である。形態の変化は、Ⅰ類→ⅡA a類→ⅡA b類→ⅡB b類→ⅡB c類の順で変化し、Ⅰ類～ⅡB a類の分布は西日本に中心があり、次第に東に移っていくという（宇治市教育委員会1991）。これを参考にすると、静嘉堂文庫所蔵三環鈴は、ⅡA b類に位置づけられ、三環鈴でも前半期のものと考えられる。

（7）鉄地金銅張壺鍔（図4-9・写真4）

鍔は四方箱に入れられており、蓋には、「銅六十二號 選 古馬 鍔」、題書きには「信州所出 古馬 鍔」とあり、蓋裏には、「雲水無盡庵藏」とあり、菊地容斎が所有し、その後、松浦の手に置かれたものであることは後述する『撥雲餘興』二集の記載を裏付けるものである。

鍔は底板の形状から、右足用の鍔と考えられる。輪部の一部の銅が剥離しているものの、柄の一部に金メッキが若干残っており、目立った欠損部もなく、残存状況は良好である。

柄は、長さ11.7cm、厚さ1.4cm、上端幅4.5cm、下端幅3.6cmで断面は長方形を呈する。柄の上端には幅2.2cm、高さ2.0cmの鍔軸受穴が壺部の口と同一方向にあけられている。

輪部の残存状況もよく、断面は蒲鉾形で、左側面の幅は、1.9cm、右側面の幅は、2.3cm、底板側の幅は、2.1cm、柄部との接続部の幅は、1.5cm、厚さは1.9cmで、右側面の幅が最も広く、柄部との接続部が最も狭い。輪部の外径は、縦16.6cm、横19.5cm、内径は、縦13.5cm、横15.5cmである。

壺部は、厚さ約0.7cmで、銅製と考えられ、一部金メッキが残る。壺部は、輪部から16.0cm突出し、高さは13.9cmである。

輪部と壺部は別作りと考えられ、まず、輪鍔全体に銅張する。壺部は、中央に合範によって生じる鋳バリの痕跡はなく、壺部先端の痕跡から、青銅の板等を叩き出して成形されたと考えられる。成形する際に、壺の底部まで金槌で叩くことができるよう、成形時は、U字形にあけておく。成形が完了した後、短辺の一方がU字形の長方形銅板を壺部内側から当てて、壺部と銅板を鋏でかしめ、最後に接続部を叩いて仕上げる。

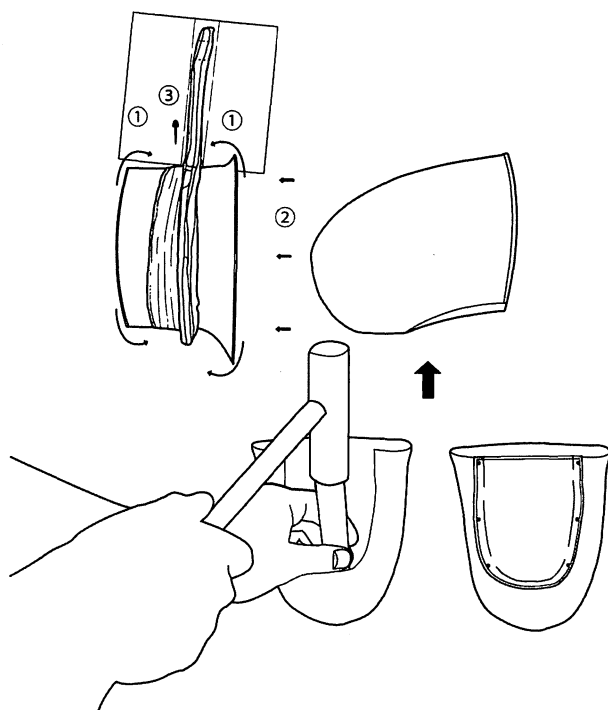
輪部と壺部の接続は、まず、輪部に銅板を巻き、さらに銅板の先を帯状の木製板に巻き付け、木板と輪部を接続する。その輪の中に叩き出しによって成形した壺部を先端から挿入し、銅を巻き付けた帯状の部分に鋌を打ち込んで接続を補強したと考えられる。さらに鉄柄の部分にも銅張り、全体に鍍金する。

この製作技術は、鉄製の輪鐙を製作した後に、別作りの壺部を接続することから、輪鐙から壺鐙へ至る過渡期的な工程を経て作られたもので、金属製壺鐙の初源段階のものと考えられ、編年的位置は、齊藤弘のA'型式に該当し(齊藤1985)、静岡県原分古墳出土の壺鐙等と製作技術において類似性が高いことからTK209段階と考えられる(財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所2008)。

『撥雲餘興』二集には、挿絵に華陽長正名臨模(三浦2004)とあるが、作者は不明である。漢文の題詞は、関根柔(痴堂)が書いている。

鉄地金銅張壺鐙は、寛永の初め頃に信州伊奈郡で掘り出され、それを菊地容斎が少額で買い取ったもので当時は全面に鍍金が残っていたという。菊地容斎は、生前松浦が古物を収集していたことを知っており、松浦に譲ることを孫に言い伝えていたことから、その死後、松浦が受け取ったものである。

また『撥雲餘興』二集の記述によると、鐙の構造について「内は木にて作り有りしかば…中略…其木は何時か朽ちはなれ今は銅一座に…」とあり、木材がどの程度使われていたかによって本論での見解と異なってくる可能性がある。



壺鐙の製作手順想定

(8) 六鈴獣形文鏡(図5-17、写真5)

蓋表には、「天地含章 第式」、「漢六鈴鑑」、「多氣志盧藏」、蓋裏には「古鏡製造多奇権六鈴附鑄是何用博古図中□未首諸説牽強無一中六鈴有聲和且清古人意豈在戲弄古色鬱蒼古氣□秦乎漢乎只貴重舞鏡名見漢書時舞人諸舞手執之六鈴鏡蓋舞人鏡伝列今日最堪奇□其藏之 北海翁 聞我此説不敢□相对珍賞里千古為作六鈴古鏡詩六鈴鏡引為 北海松浦翁晒改 明治十二年一月一日 湖山長愿稿」㊦㊦とある。

六鈴獣形文鏡は、直径10.0cm、鈴を含めると縦11.0cm、横12.4cm、重さは107.8gで鈴の一部が欠損しているものの、ほぼ完形である。

鏡は、平縁からやや斜縁の周縁部をもち、外区は、櫛歯文、櫛歯文、複波文で構成されており、それぞれの文様は圏線によって区画されている。

二重にめぐる櫛歯文は、内外の櫛歯が全て同じ位置であることから、圏線を貫通して一度に施文された二重櫛歯文である。

櫛歯文の内側にある複波文は、連続した波文ではなく「へ」の字文、または斜線で三重の波文をめぐらせている。

内区には乳が退化したものと考えられる大型の珠文が1個あるが、乳として内区を区分するものでは

なく、単なる個別の文様として、周囲に渦文を配している。

獣像は頭部がなく、胴部表現のみが5体分施文され、各獣像の間にはS字文が、それ以外の場所はS字文や弓形の突線文、爪形の突線文などで充填されている。

内区の内側には圈線があり、圈線の周りには弓形の突線文が2/3ほどめぐる。この圈線の内側と鈕の間は鈕座に相当すると考えられるが、無文である。

鈕は径1.9cm、高さ0.6cmで、鈕孔の底辺は0.6cm、高さ0.5cmの隅丸台形を呈している。

鈴は径1.4cm～1.5cmで、鈴内には石丸がある。各鈴間は、3.9cm～4.0cmとなっており、六鈴は鏡をほぼ均等に分割した位置に付けられている。

鈴鏡は、仿製鏡に鈴を配したもので、その分布は、北関東など東日本に偏重する傾向がある。分布状況の類似と鈴付きであることから、古くから鈴付の鑄造馬具との深い関係性が指摘されてきた。しかしその時期的な位置づけに関して言えば、鈴付きであること以外は、古墳時代の仿製鏡の系列とその属性の範疇から出るものではないため、森下章司の分類と編年に従って位置づけを行う。

まず、内区には、同一方向を向いた頭のない5体の獣がめぐり、退化した乳が1個確認されるだけである。また、外区は櫛櫛波文によって構成されていることから、旋回式獣像鏡系4式に分類することができる。類例では兵庫県鬼神山古墳出土鏡が知られており、その年代は6世紀前葉頃と考えられる。旋回式獣像系は、東北地方から九州南部に至るまで広く分布し、それ以前の鏡と比べると畿内地方に集中しないという傾向があるという（森下1991）。この系列の鏡の分布傾向は、鈴鏡のそれを比定するものではなく、むしろ包括する概念であるため、鈴鏡と鈴付きの鑄造馬具を個別に検討するよりは、仿製鏡の製作と流通という枠組みで検討が進められるべきであろう。

『撥雲餘興』二集には、箱書きと同文の漢文の題詞を小野湖山が記し、松浦の解説として、法量と色調、自身が筑前博多で目にした、鈴付きの輪を手、足、腕、膝、肩、腰などに打ち付けて舞踏して銭を乞う人がいたことから、鈕に紐を通し、その紐を中指に結いつけて歌舞していたものであろうという用途に関する推測文がある。

(9) 銅芯金箔張耳環 (図4-10・写真4)

銅芯金箔張耳環は、鉄鏃③・鉄刀子とともに箱に収められていたが、この箱は後世に作られたもので、武四郎の手によるものではなく、同一の箱に収められていた経緯や関係性なども不明である。

静嘉堂文庫所蔵の耳環は、銅芯に中間材を使用せず、直接金箔を張ったものと考えられ、金箔の剥離が著しく、その半分以上が欠失している。しかし銅地は劣化が進んでいるものの、形状はほぼ原型をとどめており、中実のものであったことがわかる。外径は、2.5cm～2.7cm、内径は1.4cm～1.5cmで、わずかに楕円形となる。断面は、緩い稜線を有し隅丸の多角形を呈しており、断面径は、0.6cmである。重さは12.5g、開口部の間隔は、0.3cmである。

開口部には金箔が若干残存しており、金箔を開口部に折り込んでいる。全体的な金箔の張り付け方法などは不明である。近年の群集墳の発掘調査成果から、銅芯金箔張耳環の大まかな年代推定は可能である。これによると、いわゆる耳環の構造・材質からみた全国的な変遷としては、若干の時期差は認められるものの、純金・銀製耳環（5世紀末～6世紀中葉）→銅芯金・銀張耳環（6世紀前半～後半）→中空耳環（7世紀前半）といった流れは確実であろう。

静嘉堂文庫所蔵の銅芯金箔張耳環は、共伴した遺物などは認められず、出土地も不明なことから、これに則り、6世紀前半～後半という大まかな年代比定に留めておく。

(10) 鉄地金銅張環状鏡板 (図4-11・写真4)

鉄地環状鏡板と鍍金銅釧は一つの箱に収められており、箱表には、「龍仙第十四」「釧貳」「多氣志樓藏」とある。武四郎自身はこれら2つを同じ釧と考えていたようだが、開口部は咬み合わすように閉じられており、鉄製のものは鉄地金銅張環状鏡板と考えられる。

静嘉堂文庫所蔵資料は、金箔が少量付着した鉄環で、鉄地の劣化は少ない。環状鏡板に立聞はなく、兵庫鎖は残っていないことから素環状鏡板と考えられる。

環状鏡板は、外径7.1cm、内径5.1cmでほぼ正円形である。断面は、緩い稜をもつ隅丸方形で、幅1.1cm、厚さ1.1cm、重量は100.4gとなっている。

付属具が残存していないことや、鏡板の法量、形状から年代的な位置づけが難しい為、本論では、計測値と特徴を記すことに留めておく。

(11) 鉄地金銅張釧 (図4-12・写真4)

鉄地金銅釧は、鉄芯部の残存状態は良好だが、中間材の銅、表装材の金は、ほとんど残っていない。

鉄地金銅釧は、外径縦5.5cm、横5.8cm、内径縦4.6cm、横4.7cmでほぼ正円形を呈している。開口部は、0.4cmを計り、断面は、楕円形で、縦0.7cm、横0.5cmで、重量は27.1gである。

鉄地で金銅張の釧は、全国でも類例が少なく、年代的な位置づけが難しいが、金銅製の釧は、小金沢第8号墳、篠ヶ谷第3号横穴などでみられ、全国的にも類例は少ない。一方、地金が鉄であることを重視すれば、鉄釧は、4世紀半ばから7世紀代のうち、銅釧が盛行する6世紀を除く時期に多くみられるようである(小高1989)。本製品も、共伴遺物は知られておらず、遺物の形状や材質のみで年代的位置づけが困難なため、計測値と形状、材質の提示に留めておきたい。

(12) 鉄鍍①② (図4-13・14・写真4)

鉄鍍①・②が納められた箱には他に須恵器の蓋、坏身が納められており、蓋表には「肥後熊本北岡掘出土器 矢乃根 二 松浦氏蔵」とある。また蓋の裏には

肥後熊本城の南、北岡山祇園は開創より千五十年
二今年当るとかや、其山継きの南面に数所の穴居跡と
覚しき処有りしか、其地の所有主茶園にせんとて
此比壘しかは、また新に一ツ大なる穴居他を発見したるに
其中凡疊六ツ計りをも敷へき奥に一段高き地有、
其上に土器数十、矢の根数百、壺鐙様のもの、大刀
数本、金環三十一、其内三ツは無色なるもの也、また琅玕
の勾玉一枚有りしか、此玉は我に贈られしかは、
金七円を所有主北岡庄八へ遣し候に、庄八厚く
よろこひて後の譚にもとて此二品を贈らるに、旅装
の重かれ候ともいとはて持帰り、かくなし置ける也、

此地城南に有て山岡といへるはと怪問ふに、熊本の府

は今の二本木のあたりに昔し有しか故此名有りしと云り、

明治十六年四月七日是を贈らるまゝしるす 弘(印)

とあり、出土地が、現在の熊本市春日にある花岡山周辺であったことを示す。花岡山の付近には二本木という地があり、かつては肥後国の国府であった。京から下向した国司達は、京を慕ってこの一帯に春

日寺、清水寺など奈良、京都ゆかりの名前を付けた多くの社寺を創建し、花岡山もかつては祇園山と呼ばれていた。現在、花岡山の麓には、細川家三代を祀った霊廟を有する北岡山自然公園が位置し、鉄鍬は北岡山周辺から出土したと考えられる。花岡山の北東には吉祥寺横穴群、南東には北岡横穴群があり、地名から考証して北岡神社に隣接する北岡横穴群から掘り出された可能性が高い。

鉄鍬①は、先端部と茎部が欠失している。鍬の残存長は、9.9cm、幅は鍬先端部で3.0cm、鍬身下端部で1.3cm、厚さは、0.3cm、重量は、27.4 gである。断面は長方形を呈している。

鍬①は先端部が一部欠失しているものの、全体の形状から判断して、方頭式鍬と考えられる。形態上の特徴から、鉄鍬①は、杉山のB-I形式と考えられ、型式は判然としないが、断面図や、関部への幅の狭まり具合、鍬部のサイズなどから見て、古墳時代後期後半から、終末期にかけてのものであろう。また、方頭鍬群は、日本列島において、北部九州を中心に極めて濃密に分布を示し、E様式の中心形式となっている（杉山1988）。さらに朝鮮半島でも高句麗、新羅系の遺物として広く分布し、まず6世紀前半頃に新羅地域から北部九州地域にもたらされたと考えられる資料である。『日本書紀』が伝える磐井の乱に関連し、北部九州勢力と新羅との結びつきも想定できよう。

一方、鍬②は、茎部が欠失しているが、鍬の残存は、4.1cm、鍬身は、長さ1.4cm、最大幅1.0cm、頸部の厚みは0.3cm、重量は3.1 gである。鍬は、長頸鑿箭式の鍬と考えられる。鍬身の片面が刃部の中心には稜線が確認でき、裏面は扁平になっており、先端部の断面形状は隅丸三角形を呈する。関部は、鍬のため判別が困難であるが、ほとんど確認できないほど緩やかである。鍬身部は極端に小形化しており、このことからTK217段階頃のものであると考えられる。頸部の断面は台形で、下がるにつれて狭くなっているが、頸部下方の形状は欠損しているため不明である。

箱書きから、相伴したと考えられる須恵器も北部九州産のTK217段階のものであることから、これらの遺物の年代は7世紀中葉を降らない時期であると考えられる。

(13) 長頸片刃箭式鉄鍬③・刀子(図4-15・16・写真4)

鍬③と刀子は、まとめて単独の新造箱に収められている。箱の中には、挿絵入りの書が入っていた。書には、「明治九年一月三日本区比企郡大谷村字塚山ヲ掘テ出ル所ノ土偶人ノ図」とあり、2体の人物埴輪が描かれている。埴輪の説明として、「耳ハ落テ環ノミ残ル」、「腰ヨリ下欠タリ」おそらく人物埴輪の円筒部と考えられる絵には、「如図無底ノ壺アリ」と書かれている。もう一体の人物埴輪の説明書きとして、「手ノ中ニ如此緒ニテ結ヘル形チ有リ」、「木ノ根ニテ体ハ微塵ニ毀チタリ」とある。

さらに、

右は予て去月奉申上候通り区内大谷村土偶人ヲ掘セシ地ニ一月二日人足五六人
引率土ヲ掘り候得共何分不見当猶三日ニ塚ノ廻ヲ掘候処三四軀掘シ候得共
何レモ木ノ根ニテ破リ木ノ根ハサシコシ細根モ年々ニフトリ
大根ト成ルニ随ヒ終陶器ヲ破リ候也 全体ハ一軀モナシ漸ク前図ノ如キ
首モ胴モ手モ離レノ品ニ軀見出シ候尤頭ノ様子余ホト奇品ニ御坐候此段不取敢
申上候右御送り可申哉御問合申上候凡土偶人ニハ全体ハ有之間敷ト奉存候矢ノ根小刀ナド
掘出シ申候猶又来月頃ハ掘度候得共当ノ無キ仕事難ヲニテ人足ハ多分ニ掛リ
容易ニハ掛リ兼候呵々

一月七日夜認

根岸武香

松浦君

とある。また、包紙には「大谷村字塚山ニテ掘出ス短刀鉄鍬 松浦先生 根岸武香」ともある。

鉄鍬③は、長頸片箭式の鉄鍬で、頸部下が欠失し、頸上部で2個に折れている。残存長は、11.7cmで、

鉄身部分の長さは、1.1cm、幅は1.0cmと非常に小形である。頸部の断面は正方形で、厚さは0.5cmである。重量は10.0gである。鉄身の形状とサイズから、TK217段階後半期に位置づけることができ、7世紀中頃の製作と考えられる。

刀子は、切先で2つに折れ、さらに先端部は欠失しているため全長は不明である。残存長は、18.7cmで、幅は1.7cm、茎部の長さは2.6cm、幅は1.1cmである。刃部の断面は細三角形で背の幅は、0.6cmで、重量は43.7gである。関は、刃関のみである。

形態的な特徴としては、全長、刀身長が長いことに比して、茎長が極めて短いことが挙げられる。共伴遺物である鉄の年代から、TK217段階前後と比定しておく。

『撥雲餘興』には、根岸武香が発掘した埴輪、鉄鉄、刀子が河鍋晩斎によって描かれている。また、漢文の題詞は、大槻盤溪が書いている。

鉄鉄③、刀子を含む資料発見の経緯が詳しく記されている。これによると、鉄鉄③、刀子は、武州比企郡大谷村串引池の上慶脩禅寺跡三ヶ谷榎本太郎の私有地字塚の山周辺にある群集墳3、4基を根岸武香が畑作りのために掘り、そこから出土したとされている。一方、『明治九年 千秋日記』には、一月四日に最初に「土偶人」が発見され、さっそく根岸は「土偶人」2体と金環1枚を入手していることがわかる。以後、根岸自らも発掘に関わり資料を蒐集していったことから（三浦2011）、これらは一括遺物ではなく、根岸が断続的に蒐集していった資料のうちの一部であることがわかる。また、一月八日条には、「松浦へ書状ヲ出ス」とあるから、静嘉堂文庫に保管されている書簡はこの時のものと考えられる。これらの資料の発見の経緯については、『明治九年 千秋日記』と『撥雲餘興』ではニュアンスが微妙に異なっており、「土偶人」を贈った根岸に対しての松浦の気遣いが看取される。

根岸は、「土偶人」について松浦の他、柏木貨一郎からも斡旋を受けており、武四郎による斡旋依頼の中にしばしば柏木の名前が登場し（三浦2011）、両者は、古物の譲渡などを行うなど親密な関係であったと同時に、古美術蒐集において協力なライバル関係にあったと考えられよう。

3. おわりに

以上、静嘉堂文庫所蔵の松浦武四郎旧蔵資料の中で、古墳時代の金属製品について資料評価並びにその背景について記した。傾向としては特に「勢州三重郡泊邨農民堀地獲之」掘り出しの八角形鈴①②（図1・写真1）五鈴鏡板付轡（図2、写真2）、三鈴杏葉①（図2-4・写真2）、三鈴杏葉②（図3-5・写真3）、六鈴銅釧（図3-6、写真3）、五鈴杏葉（図3・写真3）、三環鈴（図3-8・写真3）、六鈴獸形文鏡（図5、写真5）など「鈴」への執着が認められる。これらの遺物が納められている箱は、「皇和宝銅」と銘が付されたもので、近代以降の多数の「鈴」関係の資料が収められているコレクションである。先にも述べたように、このこだわりは、幼少時に本居宣長の書斎「鈴の家」の鈴を見て大いに感じ入ったことに原点が見出せるという（北海道開拓記念館2004）。今、松浦武四郎記念館に収蔵される松浦14歳の筆による『古鈴図』は、松浦の「鈴」コレクション形成の出発点であることが理解できる。

また、箱書きや付随する書簡などからモノをめぐる様々な人とのネットワークがあったことが理解できると共に、当時どのような経緯で古物が蒐集されたのかという具体例にも言及でき、文化財保護史の観点から興味深い事実をつかむことができる。例えば鉄鉄①・②の箱蓋裏には、肥後熊本城の南に位置する花岡山周辺の古墳群から土器や太刀・鉄鉄・金環など多数の遺物が採集され、琅玕の勾玉を所有主である北岡庄八に七円を支払って松浦が入手しているなど古物売買の実態を具に記録するものである。

当時の文化財保護の法的根拠は、明治4（1871）年5月23日の「古器旧物保存方」「古器旧物ノ類ハ古今時勢之変遷制度風俗ノ沿革ヲ考証シ候為メ其祥益不少候処自然厭旧競新候流弊ヨリ追々遺失毀壞ニ及

候テハ実ニ可愛惜事ニ候条各地方ニ於テ歴世蔵貯致居候古器旧物類別紙品目之通細大ヲ不論厚ク保全可致事 但品目竝ニ所蔵人名委詳記載シ其官庁ヨリ可差出事」を初めとし、この別紙品目には31の項目が記され、その対象は勾玉、管玉をはじめ石器、鏡等の考古遺物も含まれている。さらに明治7（1873）年の太政官通達 第59号「古墳発見ノ節届出方」には、「上世以来御陵墓ノ所在未定ノ分即今取調中ニ付各管内荒蕪地開墾ノ節口碑流伝ノ場所ハ勿論其他古墳ト相見ヘ候地ハ猥ニ発掘為致間敷候若差向墾掘ノ地ニ有之分ハ絵図面相副教部省ヘ可伺出此旨相達候事」と各県に命じ、明治13（1880）年11月15日 宮内省達乙第3号「人民私有地内古墳等発見ノ節届出方」では、「上世以来御陵墓ノ所在未定ノ分即今取調中ニ付云云ノ件去ル七年五月第五十九号ヲ以テ公達ノ趣有之就テハ古墳ト相見候地ハ人民私有地タリトモ猥リニ発掘不致筈ニ候ヘトモ自然風雨等ノ為メ石槨土器等露出シ又ハ開墾中不図古墳ニ掘当リ候様ノ次第有之候ハ、口碑流伝ノ有無ニ不拘凡テ詳細ナル絵図面ヲ製シ其地名並近傍ノ字等ヲモ取調当省ヘ可申出此旨相達候事」と陵墓治定のため古墳の保護を命じたものであった。このような法的整備の必要は、明治10（1877）年、堺県令の税所篤による松岳山古墳の組織的盗掘や福岡県下で古墳盗掘の実情を伝える報告などを筆頭に各地で古墳盗掘が頻発した事実（玉利1992）などに起因するものである。

かかる花岡山の遺物取引は、いわば当時であっても違法行為であったことは否めないが、往々にしてこのような行為がまかり通り盗掘者と蒐集家の関係が構築されていたことを物語るものである。

本稿は、科学研究費補助金（代表 内川隆志 基盤研究C（課題番号：22601009）「博物館における人文資料形成史の研究 静嘉堂文庫所蔵松浦武四郎旧蔵資料の研究と公開」）による研究成果の一部である。

本稿の図版は、内川隆志の原因を作業協力者の村松洋介、加藤理香がデジタルトレースしたものである。本文中の考古学的所見については、村松洋介に負うところが大きい。本稿をまとめるに際し、静嘉堂文庫中根千枝文庫長をはじめ関係者の皆様のご理解とご協力を頂いている。文献渉猟には宮内庁徳田誠志氏の協力を得た。また、文中の文書、箱書き等の解説には、國學院大學伝統文化リサーチセンターの戸波裕之氏、研究協力者である北海道開拓記念館の三浦泰之氏の協力を得た。心より御礼申し上げる次第である。

なお、ここに報告した資料を含め、平成24年度の報告書刊行を目指し、現在調査を継続している状況であるため、資料の調査、見学等について静嘉堂文庫への直接問い合わせ等はお控え頂きたく、謹んでお願いする次第である。

引用・参考文献

- 尾上元規 1993 「古墳時代鉄鏃の地域性－長頸式鉄鏃出現遺構の西日本を中心として－」『考古学研究』第40巻第1号、考古学研究会、61－85頁
- 尾上元規 1995 「古墳時代後期における鉄鏃の地域性形成について」『古代吉備』第17集、古代吉備研究会、105－115頁
- 小高幸男 1989 「古墳出土釧の基礎的研究－金属製釧について－」『君津郡市文化財センター研究紀要』Ⅲ、財団法人君津郡市文化財センター、19－90頁
- 小野山節 1959 「馬具と乗馬の風習」『世界考古学大系』Ⅲ 日本3、平凡社、88－104頁
- 小野山節 1975 「馬具の製作と工人の動き」『古代史発掘 6 古墳と国家の成り立ち』、講談社、138－142頁
- 小野山節 1998 「かたちからその技術と作る人の仕組と使う者の意図を探る～古墳時代馬具の変遷～」『近つ飛鳥工房 人とかたち 過去・未来』平成10年度春季特別展図録 大阪府立近つ飛鳥飛鳥博物館図録15、16－20頁
- 清野謙次 1955 『日本考古学・人類学史』上・下巻、岩波書店
- 後藤守一 1942 「上古時代の杏葉に就て」『日本古代文化研究』河出書房刊、484－534頁
- 齊藤弘 1984 「鈴杏葉の分類と編年について」『日本古代文化研究』創刊号、古墳文化研究会－PHALANX、71－83頁

斉藤弘 1986 「古墳時代壺鐙の分類と編年」『日本古代文化研究』第3号、古墳文化研究会－PHALANX、21－26頁
 柴田常恵 1905 「武蔵北埼玉郡埼玉村將軍塚」『東京人類学会雑誌』20巻231号、東京人類学会、375－379頁
 白石太一郎 1997 「有銘刀剣の考古学的検討」国立歴史民俗博物館編『新しい史料学をもとめて』、吉川弘文館、189－240頁
 白木原宜 2002 「鑄造馬具の地域性－特に馬鈴について－」『月刊考古学ジャーナル』No. 496、ニューサイエンス社、20－23頁
 杉山秀宏 1988 「古墳時代の鉄鐙について」榎原考古学研究所編『榎原考古学研究所論集』第八、吉川弘文館、529－644
 玉利勲 1992 『墓盗人と贋物づくり』平凡社選書142 126－129頁138－185頁
 永沼律朗 1983 「鈴杏葉考」『古代』75・76合併号、早稲田大学考古学会、1－28頁
 ヘンリー・スミス 1993 『泰山荘 松浦武四郎一疊敷の世界』国際基督教大学湯浅八郎記念館
 北海道開拓記念館 2004 第58回特別展『松浦武四郎 時代と人びと』北海道開拓記念館 62-63頁
 増田晴美編著 2007『百万塔陀羅尼の研究』汲古書院
 三浦泰之 2004 「時代をめぐる人びと」第58回特別展『松浦武四郎 時代と人びと』北海道開拓記念館
 三浦泰之 2011 「武蔵国の「好古家」根岸武香と松浦武四郎」笠木義友・三浦泰之編『松浦武四郎研究序説－幕末維新期における知識人ネットワークの諸相－』、北海道出版センター、236－246頁
 宮代栄一 1996 「古墳時代における馬具の暦年代－埼玉稲荷山古墳出土例を中心に－」『九州考古学』第71号、九州考古学会、1－33頁
 桃崎祐輔 2011 「岡山県勝安寺古墳から出土した鑄銅鈴付馬具類の予察」『福岡大学考古資料集成』4、福岡大学人文学部考古学研究室、169－185頁
 森下章司 1991 「古墳時代仿製鏡の変遷とその特質」『史林』第74巻第6号、史学研究会、773－813頁
 八尾市立歴史民俗資料館 1991 『古代氏族とその遺宝: W. ゴーランド教授を顕彰して』
 山田良三 1984 「社寺伝世馬具の壺鐙について」榎原考古学研究所編『榎原考古学研究所論集』第7、吉川弘文館、85－99頁
 吉田武三 1964『拾遺松浦武四郎』松浦武四郎伝刊行会
 渡辺みどり 2002 「鈴釧－象徴的「鈴」の一つとして－」『群馬考古学手帳』12、群馬土器観会、41－59頁報告書
 李白圭 他編 2002 『鶴尾里古墳』義城召文国郡邑地古墳群発掘調査報告書Ⅰ、慶北大学校博物館・義城郡
 宇治市教育委員会 1991 『宇治二子山古墳 発掘調査報告』
 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 2008 『原分古墳』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第184集
 島根県古代文化センター 1999 『上塩冶築山古墳の研究－島根県古代文化センター調査研究報告－』
 釜山直轄市立博物館 1983 『釜山徳川洞古墳群』釜山直轄市立博物館遺跡調査報告第1冊
 細谷義治 他編 1968 『埋蔵文化財発掘調査概報』、京都府教育委員会
 四日市市遺跡調査会編 1996 『茶臼山古墳群発掘調査報告書』四日市市遺跡調査会文化財調査報告書 16

＊ 國學院大學研究開発推進機構学術資料館准教授
 ＊＊ 國學院大學伝統文化リサーチセンター嘱託学芸員

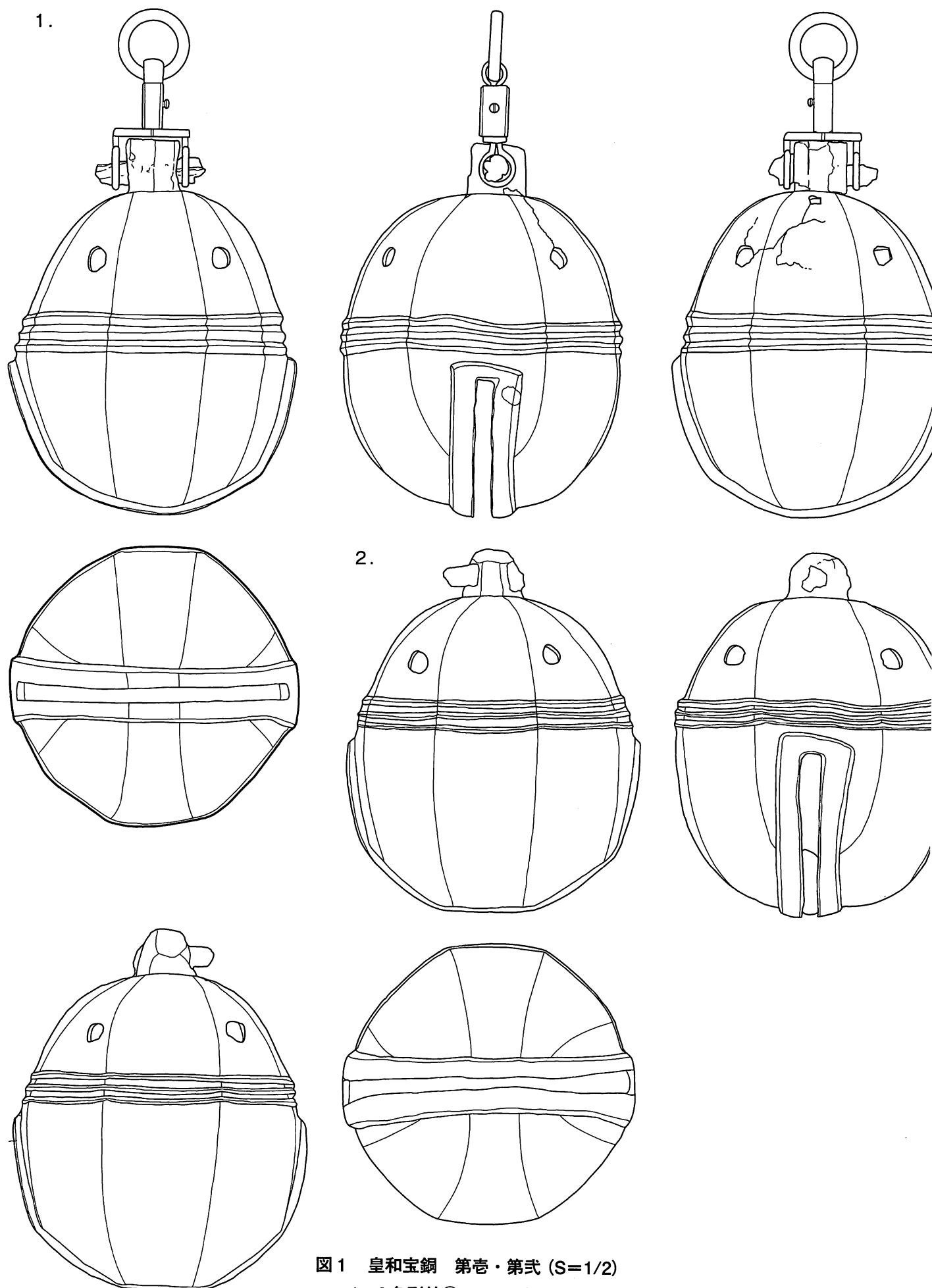
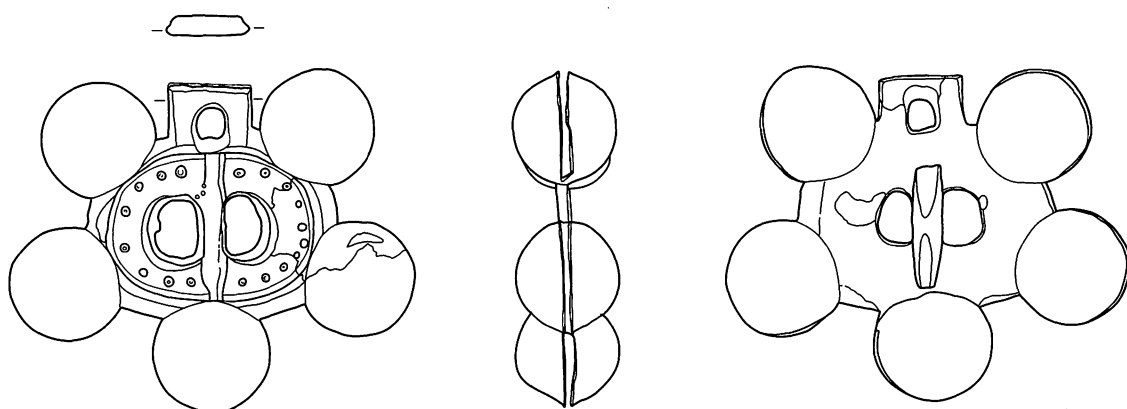


図1 皇和宝銅 第壹・第貳 (S=1/2)
1. 八角形鈴①、2. 八角形鈴②

3.



4.

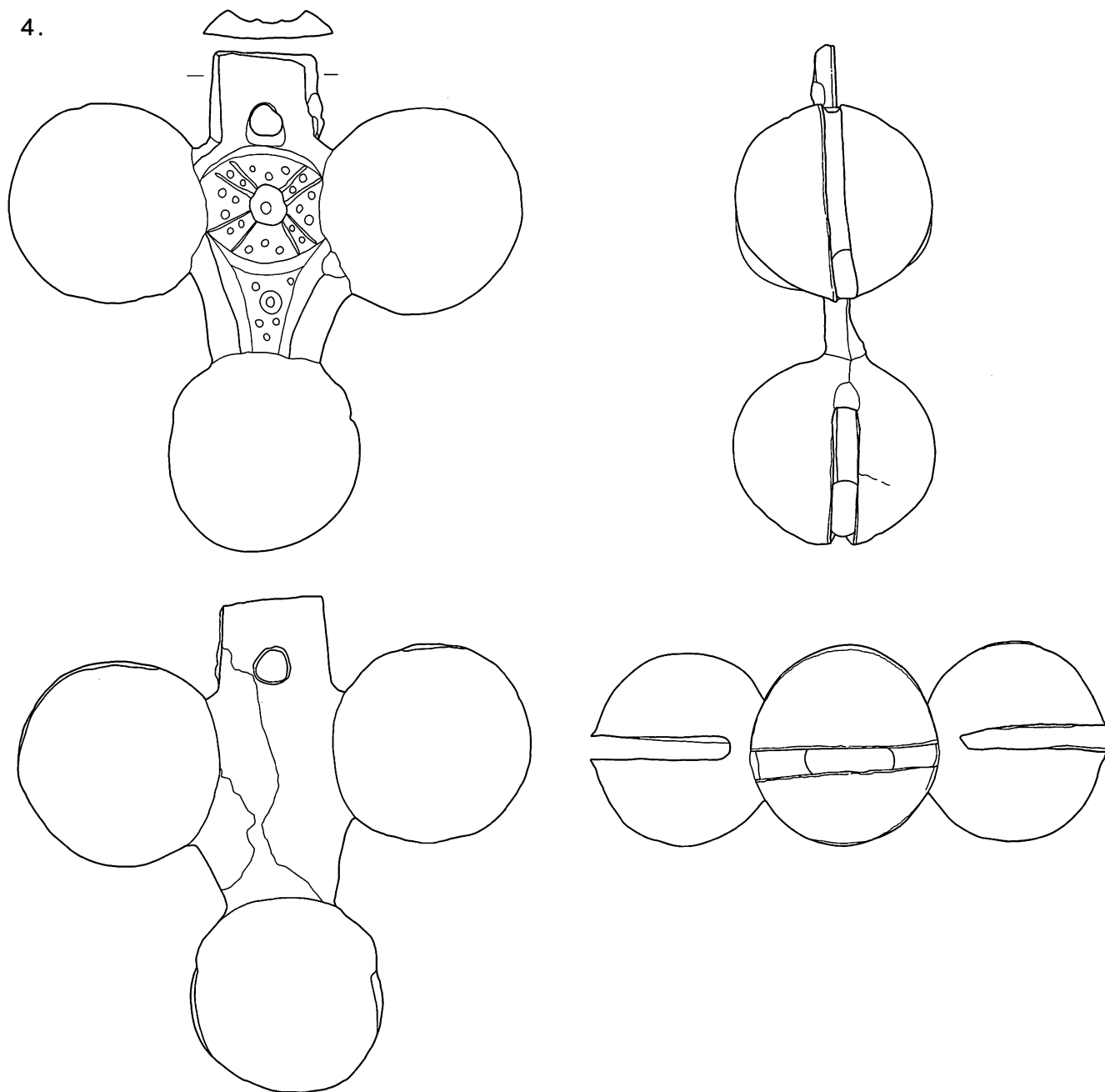


図2 皇和宝銅 第参・第四
3. 五鈴鏡板付轡 4. 三鈴杏葉① (S=1/2)

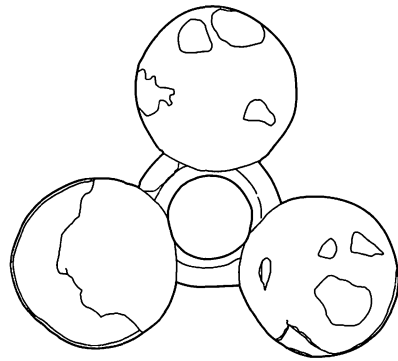
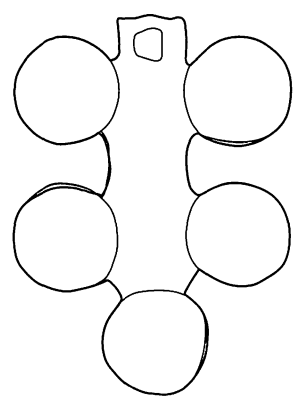
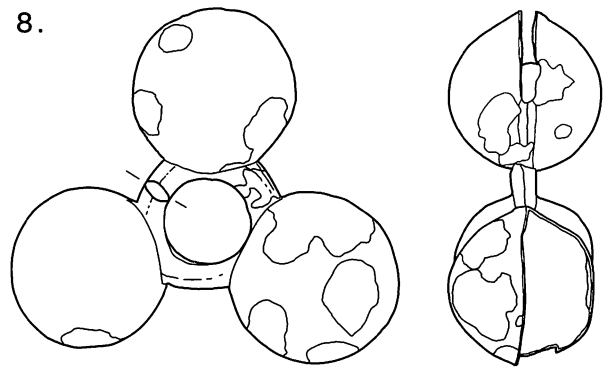
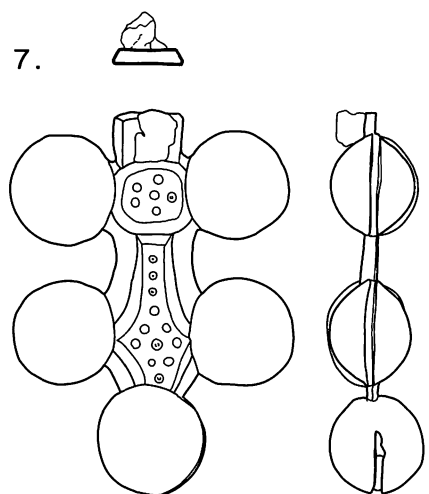
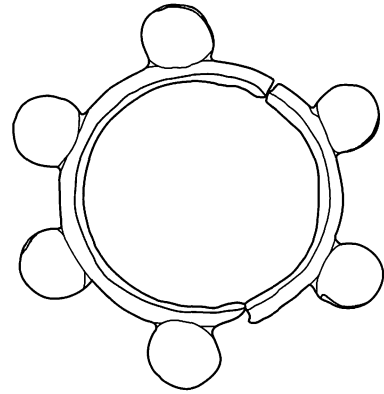
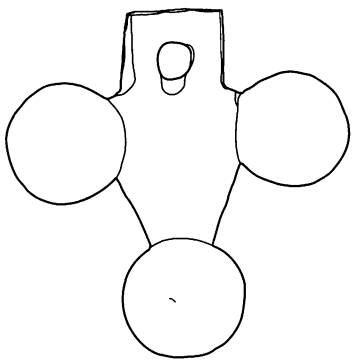
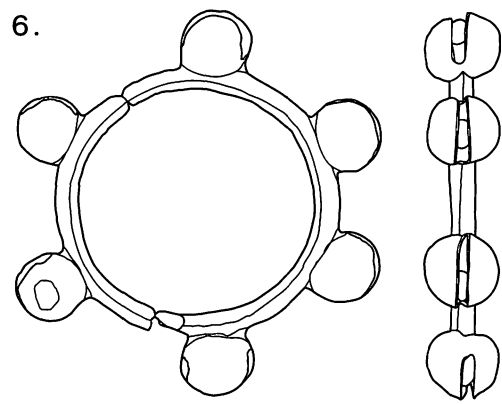
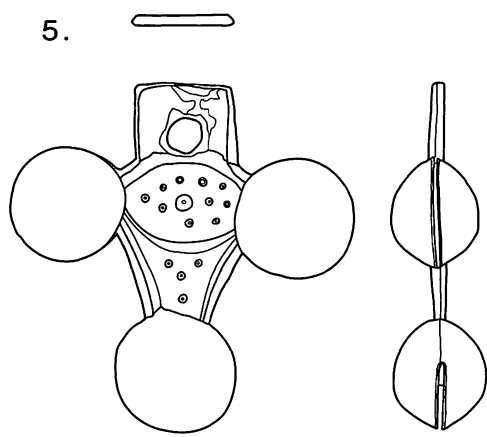


図3 皇和宝銅第五・六・七・八

5. 三鈴杏葉② 6. 六鈴銅釧 7. 五鈴杏葉 8. 三環鈴 (S=1/2)

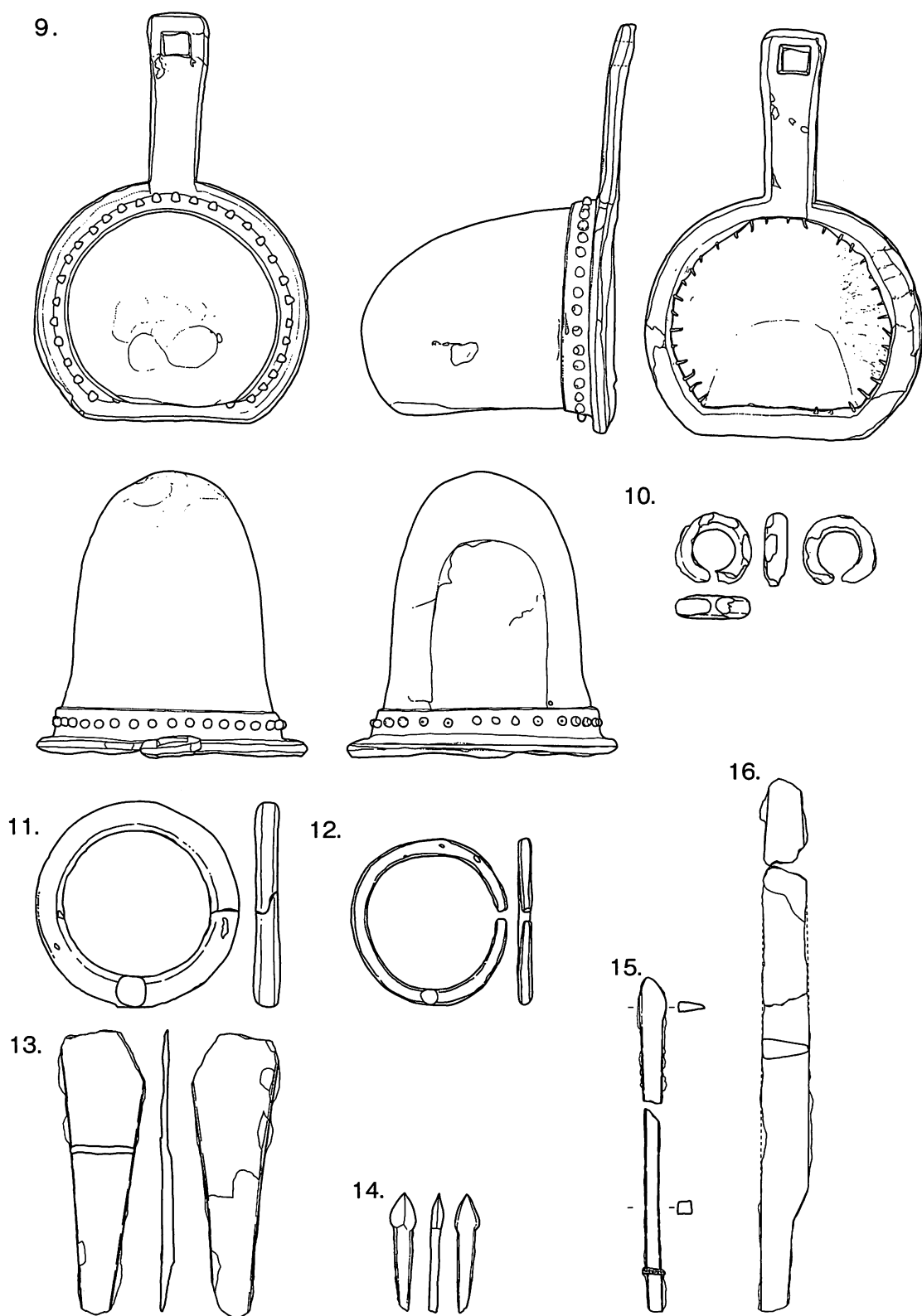


圖4 銅六十二號 選 古馬鏡 (S=1/4)、銀環、寵仙第十四 釧貳、矢乃根、鉄鏃、短刀 (S=1/2)

9. 鉄地金銅張壺鏡 10. 銅芯金箔張耳環 11. 鉄地金銅張環狀鏡板 12. 鉄地金銅張釧
13. 方頭式鉄鏃 14. 長頸鑿箭式鉄鏃 15. 長頸片刃箭式鉄鏃 16. 鉄刀子

17.

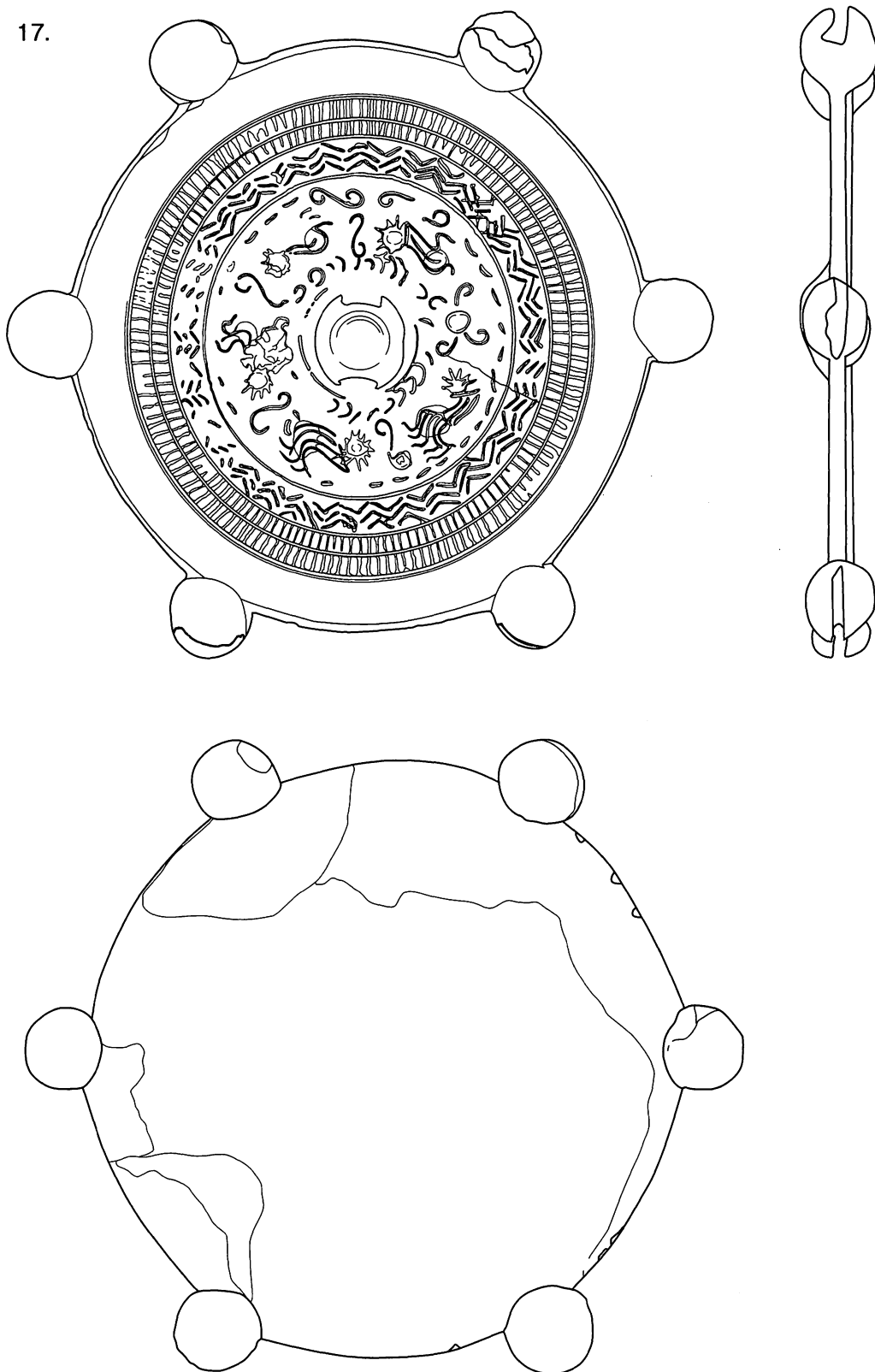
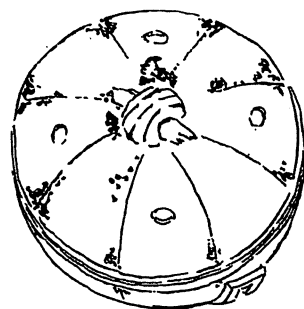


圖5 天地含章 漢六鈴鑑 (S=1/1)

17. 六鈴獸形文鏡

伊勢國三重郡泊村堀出鈴 其二



小澤道人
商圖

書松浦北海翁古鐸子圖後

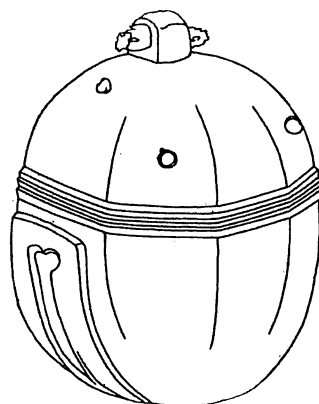
右鐸子天保年間伊勢國飯高郡泊村農夫掘地得之當時其數三為有力者所取去遂分散今三鐸子松浦北海翁之藏可謂物集所好矣清人金部觀鶴古鐸子圖前所載之鈴也余謂不然器圖者鄭玄所謂鐸子圖如推頭大上小下也余蓋謂也今邦者廣雅所謂鐸如鐘而有古也橫貫於甬中者虎氏所謂旋也今毀損其環休乘甬而振之則琅然有聲具此衆證宜定為古鐸子矣博古圖云六朝時復得鐸子於蜀引齊書始興王鑑傳曰上有銅馬以繩繫馬去地尺餘灌之以水又以器盛水乃以芒當心跪注鐸子以手振之則如雷清響與周官諸書不符蓋別物也六朝距漢代不甚遠而既發識之則出於六朝千數百年之後且不聞其學通禮經則以此為車前之鈴無足怪也雖然鐸子鉦入職四金之鈴鐸之屬也其言雖不中亦不遠豈曰擊道存者歟翁命畫師圖之徵余言乃書以誌博識之君子

明治十四年七月鷺津宣光識

神波桓書

同裏

伊勢國三重郡泊村宇田の山所掘得之古鈴 大如圖



古鐸為茶之器也

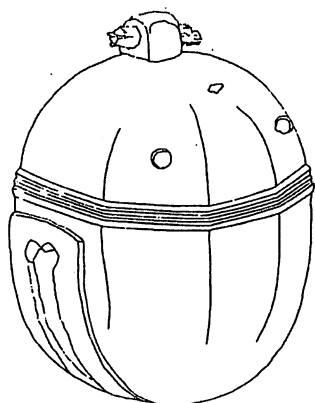


図6 上段『撥雲餘興』二集所収 下段右『撥雲餘興』所収 下段左『ちとせのためし』所収

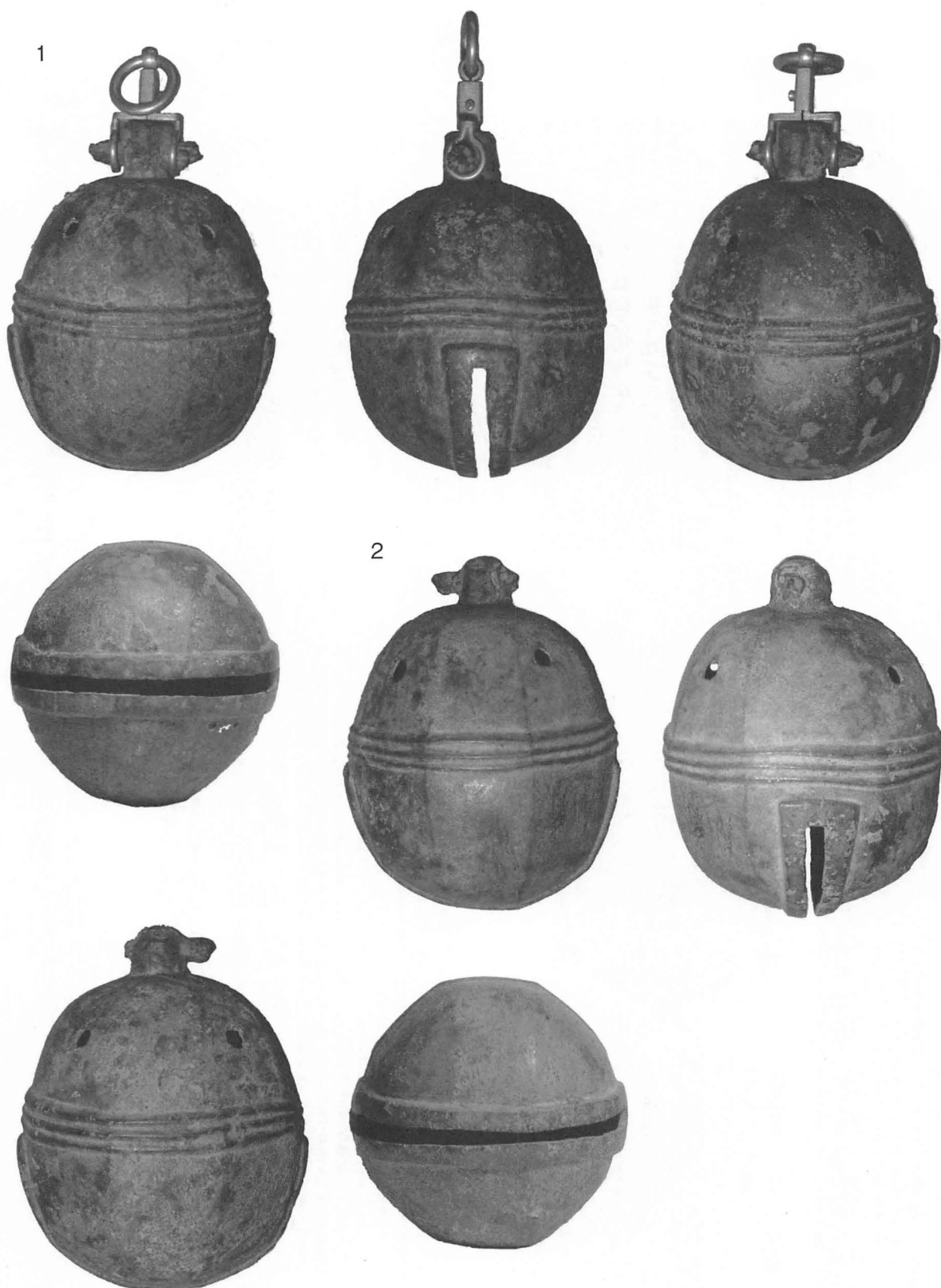
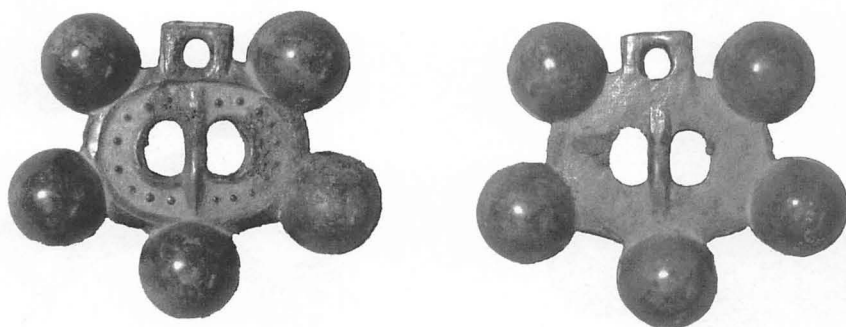


写真1 皇和宝銅 第壱・第貳
1. 八角形鈴①、2. 八角形鈴②

3



4

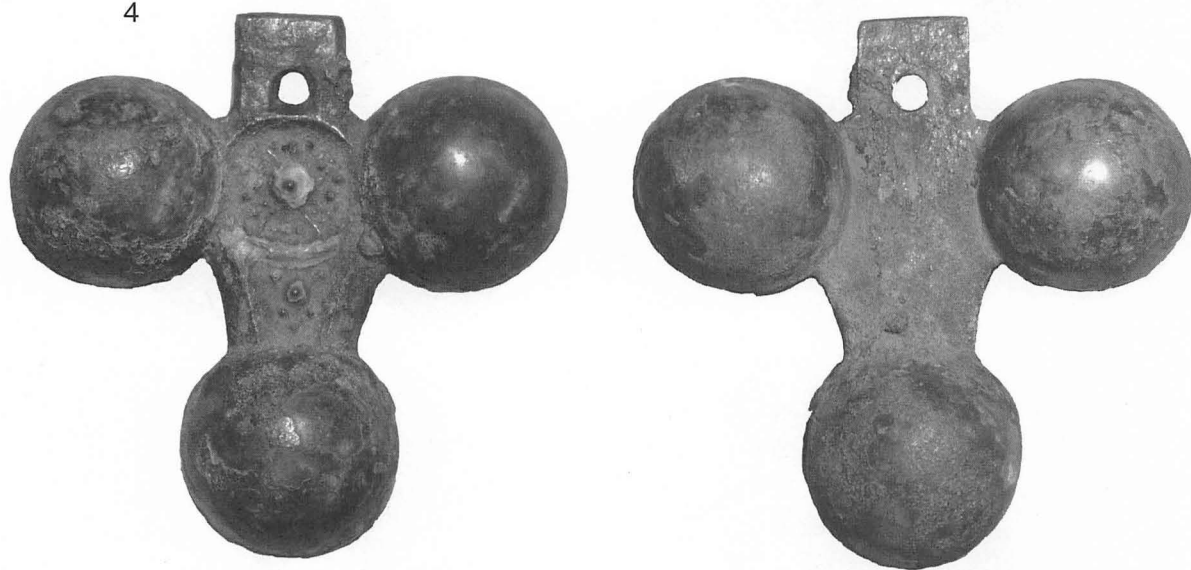
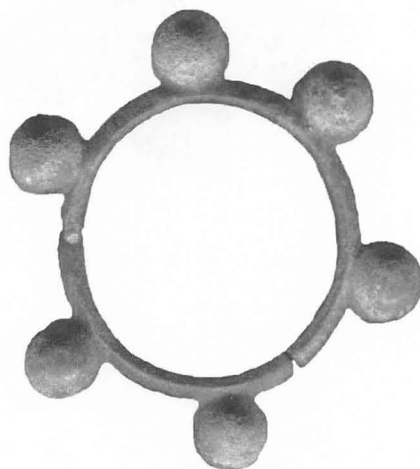
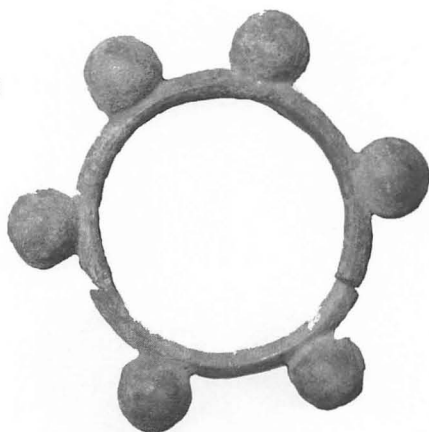


写真2 皇和宝銅 第参・第四
3. 五鈴鏡板付轡 4. 三鈴杏葉①

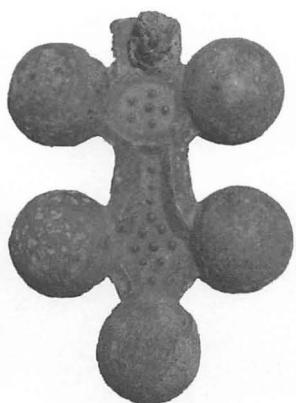
5



6



7



8

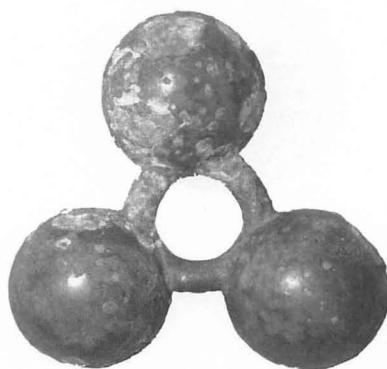
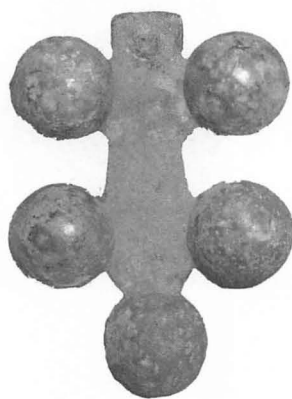
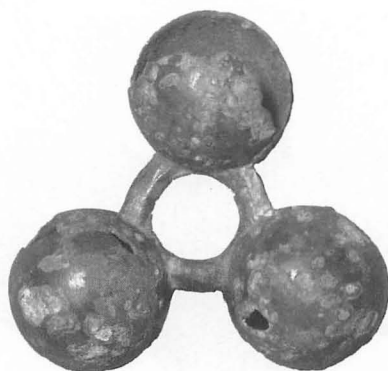


写真3 皇和宝銅 第五・六・七・八

5. 三鈴杏葉② 6. 六鈴銅釧 7. 五鈴杏葉 8. 三環鈴



写真4 銅六十二號 選 古馬鐙、銀環、龍仙第十四 釧貳、矢乃根、鉄族、短刀
 9. 鉄地金銅壺鐙 10. 銅芯金箔張耳環 11. 鉄地金銅張環状鏡板 12. 鉄地金銅張釧
 13. 方頭式鉄族 14. 長頸鑿箭式鉄族 15. 長頸片刃箭式鉄族 16. 鉄刀子

17

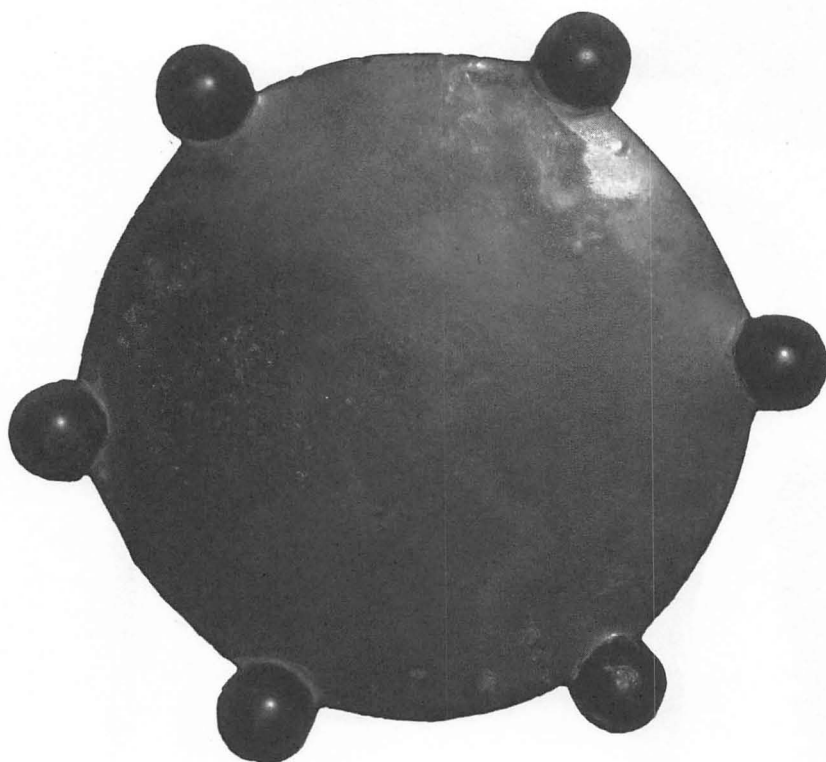
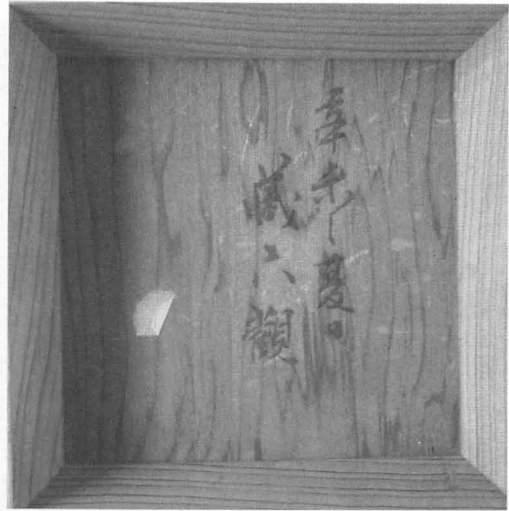


写真5 天地含章 漢六鈴鑑

17. 六鈴獸形文鏡



1



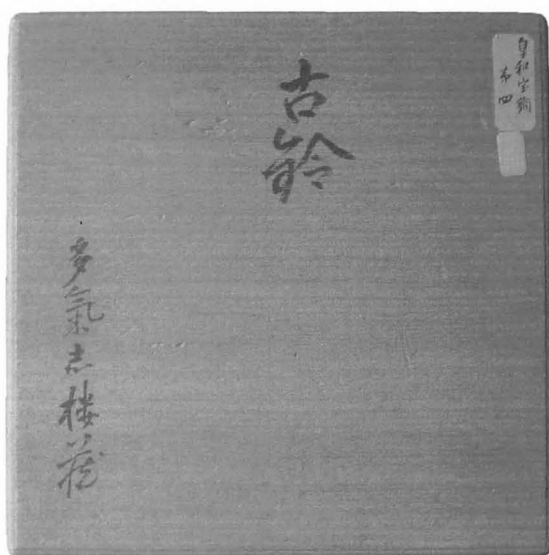
2



3



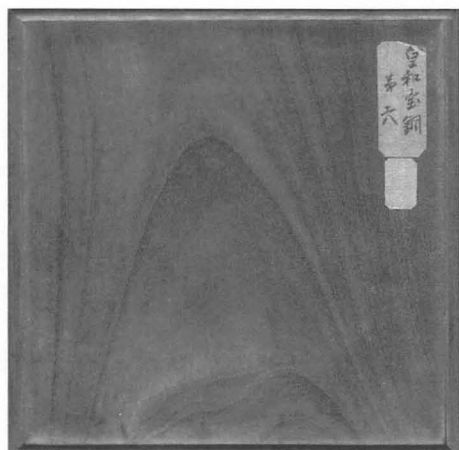
写真6 1 八角形鈴① 桐箱13.2cm×13.2cm×21.3cm
2 八角形鈴② 桐箱12.9cm×12.9cm×21.2cm
3 五鈴鏡板付轡 桐箱 12.1cm×10.2cm×4.3cm



4

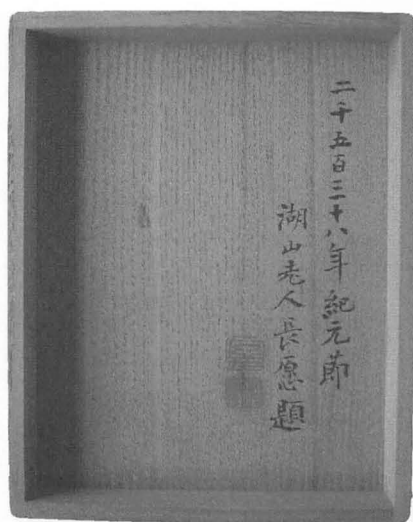
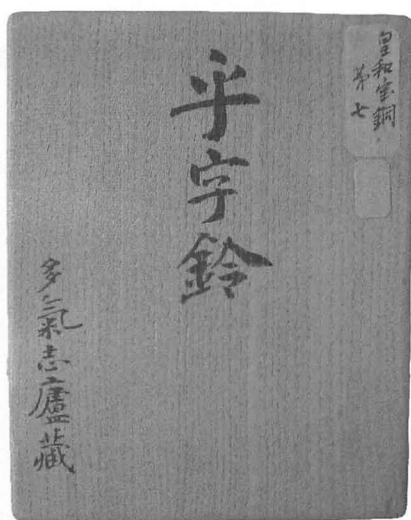


5



6

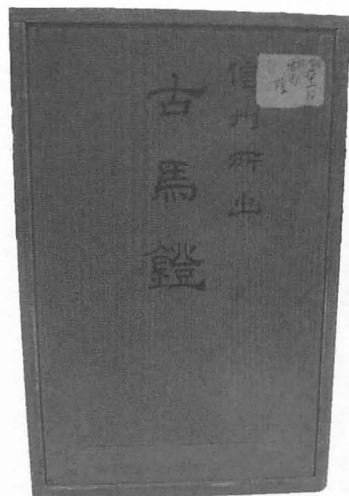
写真7 4 三鈴杏葉① 桐箱18.7cm×18.7cm×9.2cm
5 三鈴杏葉② 桐箱12.9cm×12.9cm×21.2cm
6 六鈴銅釧 桐箱 12.1cm×10.2cm×4.3cm



7

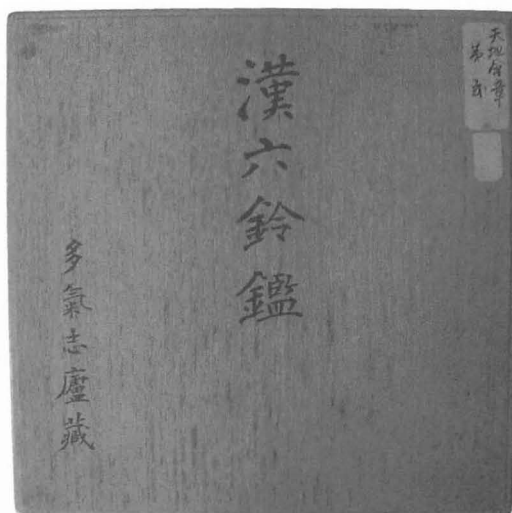


8

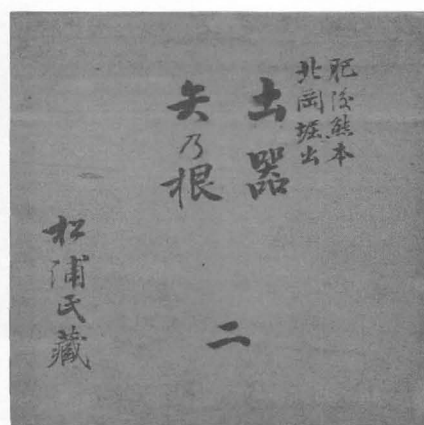


9

- 写真8 7 五鈴杏葉 桐箱13.3cm×10.6cm×7.9cm
 8 三環鈴 桐箱11.5cm×11.5cm×7.6cm
 9 鉄地金銅張壺鐙 杉箱22.7cm×22.1cm×34.5cm



10



11

12



13

写真9 10 六鈴鏡 桐箱16.2cm×16.2cm×4cm 11 地金銅張環狀鏡板・鉄地金銅張釧 桐箱16.9cm×9.8cm×3cm
12 鉄鍔 桐箱 12.3cm×12.3cm×7.7cm 13 鉄鍔 布 23.4cm×29cm 文書 23.7cm×33.2cm